

紫罗兰

北条民雄

(翻译 萩田丽子)

音吉老头儿的妻子三年前去世了，现在一个人孤零零地住在昏暗的深山里。

他有一个儿子，今年二十岁，在城市里工作。城市很远，所以他们难得见面，只能偶尔收到他的来信。

老头儿过着孤独凄凉的日子。山里人烟稀少，白天也能听见夜猫子的叫声。

太阳落山以后，天马上就黑了。树叶被大风吹得沙沙作响，这时是老头儿感到最寂寞的时候。老头儿坐在炕炉旁，突然从山岭那边传来狼嚎的声音，吓得他毛骨悚然。

他把手伸到炕炉上，想着儿子和妻子，越发感到凄凉。

妻子活着的时候，他们俩至少能谈谈儿子的事儿，算是互相抚慰。可现在连那点小小的安慰也没有了。

就这样，孤单的日子一天又一天地过去了，老头儿终于熬不住了。

“这样的日子我可受够了！”他自言自语地说。以前他很喜欢劳动，可现在变得什么也不想干了。

有一天，老头儿的脑子里突然闪过了一个念头，他一拍大腿说：

“对了！我要进城。城里有电车，有火车，还有我没见过的汽车。好吃的点心也一定有很多。对啊！我要去儿子那儿。”

于是，老头儿就这样决定了。

他一边收拾行李一边自言自语地说：

“真是的！这么好的主意，怎么今天才想起来！”

就在那时，院子里的一朵小小的紫罗兰映入了他的眼帘。“咦？”

他靠近那朵花，仔细地看了看。花朵很小，看起来有点孤单。但是，那可爱的花瓣跟晴朗的天空一样湛蓝，像宝石一样漂亮。

“我活了这么大年纪，还没见过这么漂亮的紫罗兰！”他禁不住感叹道。可是，小花看起来实在可怜，他就问：

“紫罗兰，紫罗兰。你怎么看起来这么孤单？”

可是，小花一句话也没有说。

第二天，老头儿刚要动身进城，正在穿草鞋的时候，又想起了那朵花。

紫罗兰看起来依然像昨天一样孤单。

“我要是走了的话，这朵花肯定会更孤单的。她这么弱小的身体，却在努力地开花……”

想到这儿，老头儿挪不动脚步了。

一天又一天过去了，可是老头儿只要想起紫罗兰，就不忍心走了。

“如果我进了城，也许只过一个晚上，这朵花就会枯死的。”

就这样，因为总是想着这朵花，他最终也没能离开山里。老头儿每天去照顾小花，又浇水又施肥。有一天，花儿开了口，笑着向老头儿道谢：“谢谢你，老爷爷！”

日子一天天过去，紫罗兰长得越来越漂亮。老头儿每天都和这朵花在一起，把进城的事儿也忘了。

有一天，老头儿问她：“你这么漂亮，可是一辈子呆在深山里，没有人能看见你，你一定觉得很遗憾吧？”紫罗兰回答说：“一点儿也不觉得。”

老头儿又问：“你既不能走，又不能动，没什么乐趣吧？”紫罗兰回答：“有啊。”

“为什么呢？”老头儿觉得很奇怪，歪着头想。紫罗兰说：

“其实我每天过得都很快乐！虽然我的身体很小，不能走，也不能动，可是我能看到广阔的蓝天，飘动的白云，到了晚上还能看到像宝石一样闪烁的星星。真不可思议，我身体这么小，也能看到那么广阔的天空。想到这些，就觉得我比谁都幸福。”

“原来是这样。”老头儿听了小花的话，陷入了沉思。

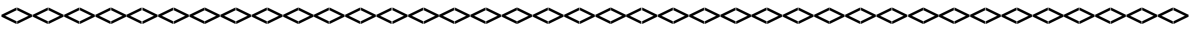
小花平静地说：“就算没有人能看见我，我也不在乎。我只想尽力开花，开得漂漂亮亮的。在深山里也好，在山涧中也罢，我只想拼命开花，直到枯萎。这是我的本分。”

老头儿默默地听着紫罗兰的话，说：

“多懂事的孩子啊！我也不进什么城了。”

终于，他放弃了进城的想法，和小花一起仰望着浩瀚天空中漂流着的云彩，不再觉得孤单。

北条民雄：1914年9月22日生まれ。20歳のときハンセン病を発病し、翌年療養所『全生園（現東京都東村山市）』に入院した。早くから文学に関心を持っていたが入院後に本格的な創作を開始し、川端康成に作品を認められ彼を師と仰いだ。1936年に発表した小説「いのちの初夜」で「第2回文学界賞」を受け、そのほかに『癩家族』『癩院受胎』を発表したが、1937年12月5日、腸結核を患い亡くなった。



（日本語原文）

すみれ

北条民雄

昼でも暗いような深い山奥で、音吉じいさんは暮しておりました。三年ばかり前におばあさんが亡くなったので、じいさんはたった一人ぼっちでした。

じいさんには今年二十になる息子が一人ありますけれども、遠く離れた町へ働きに出ておりますので、時々手紙の便りがあるくらいなもので、顔を見ることもできません。

じいさんはほんとうにわびしいその日その日を送っておりました。こんな人里はなれた山の中ですから、通る人もなく、昼間でも時々ふくろうの声が聞えたり

するほどでした。

取り分け淋しいのは、お日様がとっぷりと西のお山に沈んでしまって、真っ黒い風が木の葉を鳴かせる暗い夜です。じいさんがじっといろりの横に坐っていると、遠くの峠のあたりから、ぞうっと肌が寒くなるような狼の声が聞こえて来たりするのでした。

そんな時じいさんは、静かに、囲炉裏に手のひらをかざしながら、亡くなったおばあさんのことや、遠い町にいる息子のことを考えては、たった一人の自分が、悲しくなるのでした。

おばあさんが生きていた時分は、二人で息子のことを語り合っ、お互いに慰め合うこともできましたけれど、今ではそれもできませんでした。

来る日も来る日も何の楽しみもない淋しい日ばかりで、じいさんはだんだん山の中に住むのが嫌になってきました。

「ああ嫌だ、嫌だ。もうこんな一人ぼっちの暮しは嫌になった。」

そう言っは今まで何よりも好きであった仕事にも手がつかないのです。

そしてある日のこと、じいさんは膝をたたきながら、「そうだ！そうだ！わしは町へ行こう。町には電車だっ汽車だっ、まだ見たこともない自動車だっあるんだ。それから舌のとろけるような、おいしいお菓子だっあるに違いない。そうだそうだ！町の息子の所へ行こう。」

じいさんはそう決心しました。

「こんなすてきなことに、わしはどうして、今まで気がつかなかったのだろう。」

そう言いながら、じいさんは早速町へ行く支度に取りかかりました。ところが、その時、庭の片すみで、しょんぼりと咲いている、小さなすみれの花がじいさんの眼に映りました。「おや。」と言っすみれの側へ近よって見ると、それは、ほ

んとうに小さくて、淋しそうでしたが、その可愛い花びらは、澄み切った空のように青くて、宝石のような美しさです。

「ふうむ。わしはこの年になるまで、こんなきれいなすみれは見たことはない。」と思わず感嘆しました。けれど、それがあまり淋しそうなので、「すみれ、すみれ、お前は どうしてそんなに淋しそうにしているのかね。」と尋ねました。

すみれは、黙ってなんにも答えませんでした。

その翌日、じいさんは、いよいよ町へ出発しようと思って、わらじを履いている時、ふと昨日のすみれを思い出しました。すみれは、やっぱり昨日のように、淋し気に咲いております。

じいさんは考えました。

「わしが町へ行ってしまったら、このすみれはどんなに淋しがるだろう。こんな小さな体で、一生懸命に咲いているのに。」

そう思うと、じいさんはどうしても町へ出かけることができませんでした。

そしてその翌日もその次の日も、じいさんはすみれのことを思い出してどうしても出発することができませんでした。

「わしが町へ出てしまったら、すみれは一晩で枯れてしまうに違いない。」

じいさんはそういうことを考えては、町へ行く日を一日一日伸ばしておりました。そして、毎日すみれの所へ行っては、水をかけてやったり、こやしをやったりしました。

その度にすみれは、うれしそうにほほ笑んで「ありがとう、ありがとう。」とじいさんにお礼を言うのでした。

すみれはますます美しく、清く咲き続けました。じいさんも、すみれを見ている間は、町へ行くことも忘れてしまうようになりました。

ある日のこと、じいさんは「お前は、そんなに美しいのに、誰も見てくれない

こんな山の中に生れて、さぞ悲しいことだろう。」と言うと「いいえ。」とすみれは答えました。

「お前は、歩くことも動くこともできなくて、なんにも面白いことはないだろう」と尋ねると「いいえ。」と又答えるのでした。

「どうしてだろう。」と、じいさんが不思議そうに首をひねって考えこむと「わたしはほんとうに、毎日、楽しい日ばかりですの。」

「体はこんなに小さいし、歩くことも動くこともできません。けれど体がどんなに小さくても、あの広い広い青空も、そこを流れて行く白い雲も、それから毎晩砂金のように光る美しいお星様も、みんな見えます。こんな小さな体で、あんな大きなお空が、どうして見えるのでしょうか。わたしは、もうそのことだけでも、誰よりも幸福なのです。」

「ふうむ。」とじいさんは、すみれの言葉を聞いて考え込みました。

「それから、誰も見てくれる人がなくても、わたしは一生懸命に、できる限り美しく咲きたいの。どんな山の中でも、谷間でも、力いっぱい咲き続けて、それからわたし枯れたいの。それだけがわたしの生きている務めです。」

すみれは静かにそう語りました。

だまって聞いていた音吉じいさんは「ああ、なんというお前は利口な花なんだろう。そうだ、わしも、町へ行くのはやめにしよう。」

じいさんは町へ行くのをやめてしまいました。そしてすみれと一緒に、すみ切った空を流れて行く綿のような雲を眺めました。

本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編集室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めたものです。

